

大学生のコミュニケーション能力育成のための 臨床心理学的カリキュラムの開発（8）

ーグループワークの試行的実施による検討 その2ー

○山本文枝¹・西まゆみ¹・藤沢敏幸¹・船津守久¹・

藤田依久子¹・西川ひろ子²・井西川京子³・高城佳那⁴

(¹安田女子大学心理学部・²安田女子大学教育学部・³福山平成大学健康福祉学部・
⁴静岡産業大学経営学部)

問題と目的

コミュニケーションの難しさは、誰しも少なからず感じている。昨今では、社会性の発達障がいである自閉症スペクトラムのグレーゾーンの学生が年々増加している。しかし、対人関係に困り感がありつつも学生相談などの支援につながらないまま学生生活を送る可能性が高い。よって大学の授業の中で、互いの個性を尊重し人間関係を築くためのコミュニケーション能力を育成する支援のためのカリキュラムを検討している。さらに、発達障がいによる二次障害の問題に配慮し、コミュニケーション能力の向上のみならず、自己概念の肯定的変化をねらうことにも重点をおく。今回は、これまで教育現場で実施されている他者理解・自己理解・チームワーク等を目的とした構成的グループエンカウンター的手法を一部取り入れ、5つのグループワークを作成し試行した。実施前後での自己概念、コミュニケーション・スキル、自己肯定感の変化について質問紙を行った。

方法

調査対象者 女子大学生（3年生）84名のうち、質問紙データに欠損値のあった21名を除く63名を分析対象とした。平均年齢 20.8 歳(SD=0.42)。

調査時期 2017年9月～2018年1月。**実施方法**

研究者らが担当するホームルーム形式のクラス単位で行う授業15回のうち5回のそれぞれ一部(約15～20分)を利用して2クラスで実施した。グループワーク1回目の前と5回目後の2回質問紙を実施した。**グループワークの実施内容** グループワークはペアから始まり、徐々にメンバー数を増やしていった。1回目「4つの窓(2人ペアで自己紹介する)」、2回目「セールストーキング(2人ペアでロールプレイ式の会話をする)」、3回目「3人でトーク(3人で提示したテーマについて話し合う)」、4回目「新聞紙でレターづくり(4人で目的のもとづいた作業を行う)」、5回目「私

の四面鏡(5～6人でお互いの印象について伝えあう)」であった。1回目から5回目にかけて徐々にグループの人数を2人から5人に増やした。グループワーク実施後に、毎回、「ふりかえりシート」に記名式で自己評価および感想を記入してもらった。**調査内容** ①自己概念の形容詞(榎本(2002)で用いられた形容詞45項目)から山本ら(2017)でAQ指数と有意な相関があった12項目、②自閉症スペクトラム指数(AQ)日本語版(若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright, 2004)50項目、③コミュニケーション・スキル尺度ENDCOREs(藤本・大坊, 2007)6因子(自己統制、表現、解読、自己主張、他者受容、関係調整)24項目、④自己肯定意識尺度(平石, 1990)の自己受容因子4項目と自己閉鎖性・人間不信因子8項目を使用した。②は実施前のみ回答してもらった。回答においては倫理的配慮を伝え、留意した。

結果と考察

全体における実施前後の各得点の差の検定を行ったところ、自己概念および自己肯定感において統計的に有意差はなかったが、自己肯定感の自己受容得点が上昇し、自己閉鎖性・人間不信得点が低下していた。また、コミュニケーション・スキルはすべての因子で得点が増加していたが、特に解読因子($t(62)=-2.90, p<.01$)に有意差があった。AQ指数との関連で実施前後の得点の変化量との相関分析を行ったところ、コミュニケーション・スキルの自己統制($r=.257, p<.05$)と自己主張($r=.336, p<.01$)に弱い有意な相関がみられたが、自己概念の「くよくよする」($r=.266, p<.05$)、自己肯定感の「閉鎖性・人間不信」($r=.281, p<.05$)に弱い有意な相関がみられた。グレーゾーンの学生のコミュニケーション・スキル向上だけでなく、自己概念の肯定的変化をねらうためには、集団の状況に依存するが、従来のグループワークの方法に加えて、実施方法の工夫や配慮が必要と考える。